

中国新疆ウイグルと日本の幼児・児童教育の比較研究

A Comparative Study of Infant and Child Education in Republic China (Shinkyō Uigle District) and Japan

ウルヤティ・バウドン

Wuliyati BAWUDOHG

はじめに

私は2000年に、日本の幼児・児童教育について勉強しようと思い来日した。これまでの勉強の成果として、ウイグルのそれと比較しながら書きすすめていきたいと思う。

ウイグル人というのは、主としてユーラシア大陸の中央部、中国の西北、すなわち新疆ウイグル自治区に暮らしている少数民族の一つのことである。ウイグル自治区は古くから西域といわれて来ました。現在は中華人民共和国に属しており、その面積は日本の約4.4倍である。新疆ウイグル自治区にはウイグル人を合せて漢人、カザフ人、キルギス人、ウズベク人、モンゴル人など13の民族が共存している。新疆ウイグル自治区は中国の一部ではあるが、ウイグル人は漢人と人種的に異なるだけでなく、主導的な立場を占める漢文化から強い影響をうけながらも、様々な地理的、歴史的、宗教的背景によって形成されてきた独自の文化をしっかりと持ちつづけているのが特徴である。なお、ウイグル人の多くはイスラム教を信仰している。

(1) 教育とは何か

中華人民共和国には、56の少数民族がいる。ウイグル民族はこのなかで文化的にみて、もっとも古い民族の一つである。ウイグル族は歴史的にみて、文化的に豊富な財産を創り出してきただけでなく先進的な子ども教育について長い伝統を持っている。そして、先進的な子ども教

育から歴史的に世界でも有名な国家的人材、政治家、文化人、偉大な学者や英雄人を産み出し国際的な舞台で自己の知恵や才能を表明してきている。

人類は溢れ出る希望と信頼を持ちながら21世紀に入った。新世紀の子女達には厳しい競争が待っている。学校と家庭のもっとも重要な目的と意図は子女教育から出発する。子女たちに役に立つ、そのような教育をすることで祖国の栄光に役に立つ教育をすることが家族にとっての最高の喜びなのである。役に立つ教育をすることでの祖国の栄光。家族が得る喜びの形である。これからも世界は発展して行く。その中で私たちウイグル族は世界の諸民族に比べるとまだまだおこなっていると云わざるを得ない。

以前、中国の指導による教育は、伝統的な試験教育が中心であったが、現在は学習内容の質や量を継続する教育に変わってきている。

この機会を利用して、ウイグル民族の教育がさらに世界へ開かれる必要がある。子女達を有能な人材として教育するためには家庭教育、学校教育、社会教育という三つが必要である。この三つが協同して子どもたちを教育することが非常に大切なのである。

昔、ウイグル人民の中であった事件から考えてみることにしたい。イスラム教典法では殺人を起こしたものはロープによる絞首刑と定められている。

ある男が犯罪を犯し人殺しもしたということでも市民の前でロープによる吊るされる前、イスラムの法官が犯人に「死ぬ前に何かのぞむこと

があるか」と聞いたそうである。犯人は自分の母親と最後の別れをしたいと望みました。法官は犯人の希望どおり母親を呼んで来ました。心の優しい母親は泣きながら、子どもを胸に抱きしめました。子どもは母親にオッパイを出すことをお願いし、強く囓んでしまった。

母親は痛みに耐えかねて大声で、市民の前で泣き叫びました。市民の多くが目の前で起こっていることにびっくりしました。法官はその理由を知りたいために、犯人に「どうして死ぬ前に母親にこんなつらい事をしたのか」と聞きました。犯人の男は答えました。

すなわち私が殺人という犯罪をしてしまった責任は母親にあるのです。

なぜなら私が子どものころ、他人の畑から芋一個ぐらいを誰も気がついていない時に盗って来た時、母は私の事を「頭がいい子、お礼をいうわ」と誉めたのです。それ以来、私はこういうことを続けてきました。私は大きくなって他人の鳥や卵や果物とかを盗って来るようになりました。そしてお母さんにずっと誉められて来たのです。

時がたつと私は泥棒を専門にするようになっていました。ある時この世で絶対に割れないという御釜を盗もうとして侵入したのですが、主人に気づかれたとき、つかまるのを心配して、その主人を殺してしまったのです。もしも私が一番最初に、他人の庭から芋を盗って来た時、母が私のことを「なんでこんな悪いことをするの、この芋をどこから持って来たの、持ってきた所に返してきなさい。恥ずかしくないの」と叱ってくれたら、私は今日の日のようにはならなかったはずではないですか。母は私に乳をくれても、正しい人間になるような教育をしてくれなかった。だから、母が私にくれた乳に満足していないことから母のオッパイを囓んだのだと言ったのです。市民の多くの目が母親のほうに向き、みんな静かになってしまいました。法官は犯人の話を聞いた後、犯人の死刑をキャンセルにし、代わりに母親を死刑にすると布告し

たということです。

この事件は「教える者がどのような教育をするかによって子どもは、どのような人間にもなる」ということを教えているのではないのでしょうか。

(2) ウイグルの教育について

今、中国の教育は、伝統的な試験重視の教育から生活能力を質量ともに向上させる教育へと勇敢に踏み出そうとしています。この機会をとらえて、ウイグル民族の教育も世界へと顔を向けていかななくてはならないと思われる。

子ども達の能力を質量ともに高いものにするように教育するためには、家庭教育、学校教育、社会教育という3者による協同作業がきわめて重要である。私は日本に来てこの二年間いろいろ研究してみて、中国ウイグルの教育と日本のそれとに共通する点としない点があることを知ることが出来た。

私たちウイグル族でも昔から女性の方が結婚したら基本的に家庭にいて、子どもを育てることと家事に従事することが普通であった。しかし現在では、80%の女性の方が仕事をしているのである。そしてまた、家事と子どもの面倒をみることを実行し、さらに社会での仕事をしている多くの女性達が存在しているのである。どんな国、またはどんな民族にとっても、子どもを教育する目的は共通であると思われる。社会と父母の業務は、子ども達や少年達を育て、社会にとって有用な人材として道徳心のある未来の主人であるように子どもを育てる、ということである。しかし、この共通な目的に対して、教え方、教育に関する法律が異なっているのである。そのことから、児童の教育、とくに小学校での教育はそれぞれの国で違っていることを感じさせられた。私が強調したいことは、いうまでもなく、ウイグルの子どもに対する教育についてである。

私はまずウイグルの児童教育について説明しながら、これと一緒にウイグル民族の習慣につ

いても説明していきたいと思っている。

(イ) 子どもが生まれて学校に行くまでの家庭教育。

赤ちゃんが生まれてから40日から60日まで母親は家の中から外にでることは一切ありません。結婚式やお葬式などがあっても出席することはありません。赤ちゃんが生まれて九日目になったら赤ちゃんをユリカゴに入れます。だいたい一年間ぐらいユリカゴを使うことになります。もし赤ちゃんが女の子であった場合、生まれて一年になる前に簡単なお祝いをします。このお祝いを日本語に訳してみると「ユリカゴ記念お祝い」という意味になるのでしょうか。このお祝いを行うときには近所の子どもたちが出席します。

通常、赤ちゃんが生まれて12日目になるまで家族の人以外の者は絶対にお祝いには行きません。赤ちゃんが生まれて病院から家に戻って来た日から一ヶ月ぐらいまでは、家のドアに赤い布を貼っておきます。こうしておくことでのにかの用事で来たお客さんは赤い布を見て家には絶対に入りません。

私は先に赤ちゃんをユリカゴに入れると言いました。こういうと赤ちゃんのことをかわいそうと思っていられるかもしれませんがまったくそういうことではありません。赤ちゃんをユリカゴに入れることで、子どもの頭の形をきれいにすることができます。腕や足の骨などもまっすぐになり、子どもを綺麗に育てることができるのです。

男の子だったら、7歳になったら割礼します、これとともに大きな式も行なわれます。これは割礼式と言われます。割礼式と言ったら多分驚くかも知れませんが、ただ割礼することだけではなくて割礼式当日に親戚や友達などを呼んでお祝いのパーティーを行いません。昔、パーティーは割礼をやった子どもの家でみんな集まってやっていたのですが、現在ではほとんどレストランでやっているようです。パーティーに来た大人の

お客さんが割礼した子にお祝いとしてお金をあげます。子どもは割礼された日から一週間まで外にもでないで家の中で休みます。割礼することは健康と清潔にいいと言われてます。この割礼式もウイグル族の伝統的な大切な式の一つであるのです。

ウイグル人の母親は子どもに対して大変に愛情深いといえます。赤ちゃんが濃固形の物を自分で食べる事が出来るようになって、しばらくのあいだは母親が口の中で柔らかく嚙んで食べさせるという習慣があります。2歳ごろまでお乳を飲ませます。そうした親に、自分の子どもが将来どういう人になって欲しいと思うかを尋ねてみると、多くの親が「アキエンレック」な子どもになって欲しいと答えます。「アキエンレック」とはどういう意味であるのかをウイグル語辞典で引いてみると「知恵を持つこと、聡明、利口であること」と説明されています。しかし、実際には、このほかに年上(老人)を尊敬し、年下(幼い子)を愛護するという意味が含まれているのです。

ウイグル人の家庭では一般に、この「アキエンレック」ということを基準にして子どものしつけが行われています。聡明であるだけでなく、老人や親を尊敬し、幼い子に対して優しく面倒をみることの出来る子どもになることが期待されているといえます。

また、ウイグル人の家庭では自分のことは自分でできるということはもちろん、あいさつができるということも重視されています。さらにウイグルの子どもたちは、12歳にもなると家庭の一員としてそれぞれの役割が与えられることとなります。農村の場合、男の子なら主に外での手伝いが多い。女の子なら家事の手伝いが多くて家の中でする仕事を中心となります。ウイグルの社会では、子どもが大きくなって何も出来ないという事は親の責任であると見なされています。こうしたしつけは、特に子どもが幼い時には母親が中心となっているが、だからと言ってけっして母親だけに任せられているわけ

ではありません。母親の役割は大きいものがあります。母親は必要に応じて、父親の判断について注意することになります。子どもへの対し方は一般に母は優しいが、父親はえてして厳しいところがあります。

更に、とくに注目しておきたいことは、子どもたちは両親からしつけられるだけでなく、毎日の生活のなかで近所のおじさん、おばさんから時に注意されたり、教えられたりして人としての教育を受けているという事実です。つまり、子どものしつけは家庭だけではなく地域や社会全体の役割だと考えられていることです。

こうしたウイグル人の伝統的なしつけの文化は、近年都市部では「改革開放」政策のもとでの近代化が進み変わりつつあるようにみえます。ウルムチのような大都会ではしっかり勉強して、将来、知識人や社会的地位のある人になって欲しいと願う親も少なくありません。子育ての目的が「勉強のできる子」中心になり、家庭だけでなく地域で子どもを育てようというウイグル人の伝統的子育て意識が揺らいできているようにみえます。しかし、ウイグル人が多く住んでいる農村地域では現在でもそのまま生きているといえそうです。

ウイグル人の生活はけっして楽ではありません。子どもたちに十分な教育がなされているとは言いがたいのです。しかし、現在までのところ子どもたちの表情は確かに明るく生き生きとして将来に夢や希望を持っているようにみえます。これは、家庭や地域の教育機能がまだ生きているからだといえます。

(ロ) ウイグルの子ども達の学校教育

現在ウイグル語を用いて授業をしている小学校は自治区内に3700以上あり、およそ110万人の子どもたちが学んでいます。小学校ではクラスの平均児童数は29名前後であり、平均20.7名の児童に一人の教師が配置されています。授業時間は45分が単位で、一日の授業は4～7時限目まであります。従って午後4時すぎまでには、

ほとんどの子どもたちは下校していることになります。

ウイグル語や他の少数民族の言語によって行なわれる教育を新疆ウイグル自治区では「民族学校」と言います。これらの学校では小学校4年から語文(国語)の一部として、漢語(中国語)を学ぶことが義務づけられ、それは高校までつづきます、しかし、英語などの外国語は最近になって習いはじめたばかりです。漢語が外国語として扱われているのです。全国で使われている統一教科書の内容はウイグル語に訳したものがほとんどです。しかし、語文(ウイグル語で書かれた国語のこと)や音楽の教科書には独自に作成されたものがあります。ウイグル人は古くから独自の言語や固有の文字を持っています。ウイグルの学校ではウイグル語による教育が小学校段階から行われています。学校教育の制度は基本的に6, 3, 3, 4制。つまり小学校6年、中学校3年、高校3年、大学4年で日本と変わりません。しかし、農村部では地理的環境や経済的条件の違いによって多少異なる場合があります。小学校入学時の年齢は7歳が原則ですが、条件が整ったところでは6歳での入学も認められています。中国では、1986年義務教育制度が導入され、小学校と初級中学校を合わせて9年間が義務教育となりました。1995年の統計によると新疆ウイグル自治区では62%の地域で義務教育が普及しており、全自治区の小学校を合わせた就学率は78.2%になったといわれています。ウイグルの人口の85%以上は天山山脈の南にあるカシュガル、ホータン、アクスなどの地域に住んでいます、これらの地域では多くの人が農業で生計をたてていますが、先に述べたように収入は乏しく、子ども達の教育費は親にとって大きな負担となっています。

(3) ウイグルの子どもたち

(1) 遊びについて

ウイグルでは子どもたちは実によく遊んでい

ます。街でも村でも目を輝かせ、夢中で遊んでいる子どもたちの姿をいつでもみることができます。このように遊んでいる子どもたち、石けりをしている女の子たち、独楽まわしに熱中している男の子、輪になってしやがみ、真剣な眠差しでトランプのようなゲームに没頭している子どもたち、それも一人や二人での遊びではありません。6人、7人、時には10人以上の子、それも大きい子、小さい子が一緒になって遊んでいるのです。なかには弟や妹を抱っこして参加している子どもさえいます。ウイグルの人々の生活は日本のそれに比べるとはるかに貧しいです。子どもたちも家の生活の担い手の一人として一生懸命に働いています。

学校から帰って来たらまず宿題をします。そして、それが終わったら家の手伝いをし、その後には遊びます。けっして暇があって遊んでいるわけではないのです。しかし、寸暇を惜しんでこのように仲間と遊びに熱中し、楽しむという体験のなかで、ウイグルの子どもたちは人が社会の中で生きていくうえで最も大切な力である社会性を身につけていくと考えられるのです。ウイグルで子どもたちの遊んでいる様子を見ると、助け合いもあるが、時にはけんかも起きます。口げんかの場合もあるが、とつくみあいのけんかになることも珍らしくはありません。でも、そんな時必ず仲間の誰かが止めに入って仲直りをさせています。

教育は大人からの発信作業である。子どもは子ども同士でも学んでいるのである。子ども同士による教育が「遊び」なのだということを考えました。親の仕事を助け、大人になるための努力も遊びに含まれています。機械に遊んでもらうのではない、自然の中で体と頭を使うという子ども本来の遊びがそこにあるといえます。

(ロ) 手工業や工芸について

ウイグルの子どもたちの手伝いの内容は子守りや畑仕事など多様であります。しかも片手間なものではありません、時間的にも長くかなり

きついものであるといえます。子どもも家族の一員としての役割をもっているのです。ウイグルでは子どもたちは昔の日本の子どもたちのように異年齢の子と一緒にになり、路地のあちこちで楽しそうに遊ぶのを見ることができます。しかし、こうした遊びはけっして手伝いに優先されるものではありません。そのことは、多くの子どもが学校から帰ったらまず家の手伝いをし、それが終わってから遊びにいくと答えていることからわかります。

また、ウイグルの子どもたちはお母さんやお父さんと一緒によく働いています。職人街を歩いていると間口が一間とないような 仕事場でお父さんと一緒に木工をしたり、仕立てをしたり、金細工をしたりしている姿をよく見かけます。バザールではすいかや学用品やふかした芋を売っている子どもがたくさんいます。

ウイグルの子どもたちはこのように一生懸命お手伝いをすることによって、さまざまな技能を身につけたり、親が毎日自分たちのためにしてくれる事の意味を理解したり、家族の一員としての自覚や自立への意欲を高めていると考えられます。そして、さらに大切なことは、お手伝いという経験は子どもたちに主体性や自主性を身につけさせる働きがあるということであろう。今の日本では働く子どもの姿をみることはほとんどないことと対照的である。

多くの大人、とりわけ若い親にとっては子どもが仕事をするなどおおよそ考えられないことかもしれません。しかし、日本でもついこの前まではそんな生活があったといえます。「日本の子ども」という本の中で、かつての子どもについてそのようなことが述べられていました。

ウイグルでは地域によって、また家庭によって状況は異なりますが、学校から帰ったら、まず宿題をし、それから家の手伝いをします。手伝いをしている子どもたちの表情は実に真剣で生き生きしています。ウイグルの子どもたちにとって手伝いはしつけのための、単なる形式的な仕事ではないのです。家族や自分を生かす

ための労働そのものということができるのである。

(4) 教師とは、道徳教育について

学校教育について考えて行く前に、まず教師についてみておくことにしたい。教師はまず子どもたちに対して合目的に活動し、一方では子どもたちの思考する法則性に即して活動することが必要であります。教師は教育の専門家として、自らの専門分野の指導力の向上に積極的に努めるとともに、教育課程編成全体にわたる視野をもつことが重要であります。教師の仕事は素晴らしいものです。

つぎに道徳教育について考えて見たいと思います。

道徳教育とは、豊かな心をもち、人間としての生き方の自覚を促し、道徳性の達成をめざす教育をいいます。又徳育ともいいます。伝統的な道徳教育は道徳性をその社会で是認されている道徳の内面的自覚ととらえられています、今日ではそれを中心として日本の学校では行われているようです。道徳性を発達の諸段階においてとらえる立場からは、その段階的発達を促すことが道徳教育の目標とされています。その歴史を振り返って見ると道徳教育は元来、宗教を基盤にして宗教教育と深い結びつきをもって行われてきました。学校における道徳教育は主に社会科を中心として学校教育の全体において行われてきています、小、中学校における道徳教育も、学校の教育活動全体を通じて行うものとされています。基本的人権の尊重を中心とすることが、今日における道徳教育の課題であるといえます。また、道徳教育は、基本的には、家庭におけるしつけをはじめとして、家庭、学校、地域、広くは社会における全ての教育活動をとおして追求される必要があるといえます。そこで子どもと大人の交流について考えて見たいと思います。

ウイグルでは老人と子どもが一緒にいる光景をよく見かけます。幼い子ども達が町で遊んで

いる、土間に腰掛け、少し笑いを浮かべ、おばあちゃんやおじいちゃんと手をつないでうれしそうに買い物に行く子どもも、ロバ車に乗っておばあちゃんの膝で無心に眠っている幼い子。古来、洋の東西を問わず老人は人生の先輩として尊敬されてきました。老人が語る経験や生活の知恵や知識は、若い世代にとって人生の貴重な情報であります。しかし、それだけではありません。おじいちゃんやおばあちゃんの昔話や教訓は、子どもにとって豊かな心を育む糧なのです。また親に代わっての慈愛に満ちた世話は幼い子どもたちの心の中に人間への基本的な信頼感を高めるものと考えられます。

今、日本ではとすると老人は心身ともに衰え、社会が保護してあげなければならない、隔離されたような状態になっているのではないのでしょうか。あるいは元気な老人は自分たちの遊びや社交に忙しく、孫の世話など好まなくなっているのではないのでしょうか。老人と子どもが心を通わす場はほとんどないといっているようです。しかし、ついこの前までの日本ではウイグルと同じような光景が見られていたのです。親は仕事に忙しく子どもをかまわてやることができなくても祖父母が優しく面倒を見ていたのです。

(5) いじめについて

日本では友達にいじめられたり、けんかをしているのを見ても見ぬふりをする子どもがほとんどだということです。ところが、ウイグルでは違います。そもそも日本でいわれているような陰湿ないじめはほとんどありません。でも、からかったり、意地悪をしたりする子どもがいないわけではありません。注目されるのはそんな時に必ずといっていいほど注意する子どもがいることです。ウイグルの子どもたちに、いじめやけんかをしているのを見たらどうするかと尋ねてみました。これに対して男の子であれば、女の子であれば、ほとんどの子が「そんなことするなよ」「やめて」と割って入ると答えて

いました。

日本の子どもたちがいじめを見ても見ぬふりをするのは、モデルとしての大人がそうだからにはかならないのではないのでしょうか。電車の中で人が酔っぱらいにからまれていても知らん顔、中学生、高校生がタバコを吸っているの見ても知らん顔、障害者やお年寄りが駅の階段で困っても知らん顔、それが、今の多くの大人の姿だと言っては言いすぎでしょうか。ウイグルでは、幼い時から子どもが年齢相応に家庭や地域、学校などで体験すべきことをできるような自由を確実に保障しているといえます。いじめに限らず、不登校や非行、また無気力化などは、いずれも子どもの自主性、社会性、道徳性、共感性など「心の能力」が年齢相応に発達していないために一種の「症状」として起こってきているのではないのでしょうか。なぜこんなにも日本の子どもとウイグルの子どもは違うのでしょうか。学校でなにか特別な教育をしているのだろうか。そうではないでしょう。大人たちが日々の生活の中でそうした姿を見せ、それが子どもの行動に反映していると思われるのです。ウイグルの子どもたちは外ではじつによく遊んでいます。そのようすを見ていると前にも述べたように取り合いもあるし、時には、激しいけんかも起こっています。そんな時、大人が通りかかると、必ずと言っていいほど声をかけ注意しているのです。

冷静に考えて見たいとおもいますが、学校や教師の対応に多小の問題があったとして、思いやりという道徳心などが、年齢相応に発達していれば、中学生にもなって級友を死に追い込むまでいじめぬくことはないと考えられます。

また、たとえ仕返しへの恐れがあるとしても、正義感や勇気があれば級友がひどくいじめられているのに見て見ぬふりをするのではないと思われま。道徳性や耐性が身につけていけば、非行に走ったり、ちょっと注意されただけで教師をナイフで殺したりすることなどありえないでしょう。意欲や自主性があるのに、いちいち

誰かに指示されないと行動できないということは理屈にあわないようにおもわれます。

ウイグルの子どもたちは、本当に仲がいい、友達と群れをなして一緒に遊んだり、勉強を教えあったりしています。学校でいじめられたり、悪口を言われたり、意地悪をされた経験はどの子もないといえます。みんな仲のよい友達だといえます。お母さん、お父さん、そして先生方にも尋ねてみました。みんな様に日本のような陰湿ないじめはウイグルの子ども達の世界にはないといえます。また大学生にも子ども達のところにいじめがあったかをたずねてみました。みんなそのような記憶はないといえます。日本のような陰湿なものではなく軽い意地悪のようなものがほとんどだといえます。

もともと「ウイグル」ということばには「みんな一緒に仲がいい」という意味が含まれているのだと聞いています。確かにウイグルの子ども達の間をみているとそれを強く感じるのです。

本当にウイグルの子どもたちはそんなに楽しいのでしょうか、新疆ウイグル自治区でもっとも暑いところでトロファンという地域があります。私は1995年、新疆教育学院で研究をしていた時、ウイグルの子ども達の勉強状況を確認するためにトロファンの学校を訪ねてみたことがあります。まだ9月の初めでしたが40度を越す暑さでした。狭い教室に40人近い子どもたちが学んでいました。そこでの体験を元に学校について考えて見ようと思います。

(6) 学校について

ウイグルの子どもたちはみんな「学校は楽しい」「学校が大好きだ」といいます。あまりにも優等性的な答えが返ってくるので、「学校では勉強しなければならぬし、いやなことだってあるんじゃない？」と聞きたくなくらいです。なぜ学校が楽しいのか理由を尋ねてみると、どの子もまずあげるのは「友達が一杯いるから」「友達と遊ぶことができるから」「クラスのみん

なが仲良しだから」そして「先生が優しく新しい知識をいろいろ教えてください」と言えます。本当にそんなに楽しいのだろうか。

先に述べたトロファンの学校では狭い教室に40人近い子どもたちが机を並べていました。クーラーはもちろん扇風機也没有。でも、デレーッとしている子どもは一人もいませんでした。

みんな背筋を伸ばし、きちんとした姿勢で先生の話を聞いていました。私語したり、手遊びしている子どもはいませんでした。先生が質問すると、きちんと立ってはっきりした声で意見をいいます。他の子は静かにそれに耳をかたむけています。授業中の教室は、とても静かな落ち着いた雰囲気でした。ところが、ベルがなって十分間の休み時間になったとたん驚きました。子どもたちはどっと教室を飛び出し、灼熱の校庭に出て行くのです。そして5人、10人、多い所は30人もの子どもたちが一緒になって遊びに熱中していました。教室に残っている子は一人もいません。子どもたちの表情は生き生きしていました。ウイグルの子どもたちは学校生活を本当に楽しんでいるということを感じたのです。

(7) ウイグルの子どもたちの生活が教えてくれること

(イ) 生活リズムについて

生活リズムがきちんとしているということは、子どもが毎日を生き生きと過ごし、体と心を健やかに発達させていくうえできわめて大切なことでもあります。子どもの睡眠時間にはかなりの個人差があります。低い学年では10時間、高学年では9時間程度の睡眠が必要だと言われています。また学校は8時半ごろにはじまりますが1時間目からすっきりした頭で、授業に集中することができるには、低学年なら2時間くらい前、高学年なら一時間半くらい前に自分で目を覚まし、起床することが大切です。それには、低学年では夜8時半頃までに、高学年では9時

ごろまでに床につくことが望ましいこととなります。

ウイグル自治区の首都ウルムチ(人口約40万人)では87.9%の子ども達が7時前に起きていました。少子化や経済発展の影響をうけて、ウルムチでも子どもの生活環境は大きく変わって来ています。それでもこの割合は日本の子どもの53.8%より30%以上も高いといえます。また就寝時刻についても日本の子どもでは10時前に寝るという子どもは49.1%に過ぎないのに対して、ウイグルの子どもたちは日本の子どもにくらべて早寝、早起の傾向がみられます。対象とした子どもの学年や性別はいろいろでしたが、ほとんどの子どもが6時前に起き夜は9時～10時の間に寝ていると答えています。当然睡眠時間は日本の子どもより長いといえます。こうした事実は、日本の子ども達の生活リズムがウイグルの子ども達にくらべてあまり望ましくない状態にあることを示しているといえます。生活リズムの乱れや睡眠時間の減少は、当然ものごとくにたいする意欲を減退させるだけでなく、ストレスを高めることになるといえます。ウイグルの子どもがよく寝ているということは、睡眠時間は9時間以上とっているということでもあります。

(ロ) 物の与えられ方と世話のされ方について

子どもの欲求のままに、ほしがるものを次々と与えるのはけっして好ましいことではありません。これはフランスの有名な思想家であるジャン・ジャック・ルソーが述べているように「子どもを不幸にする最も確実なことだからです。」なんでもかなえられては、子どもの欲望は風船のように肥大し、我慢すべき時に我慢する力、すなわち耐性のない子になってしまうのです。また、欲しい物を得るために努力する意欲も、ものを得て感動する心も、その物を大切にやる心も育たなくなってしまう。それだけではありません。与えてもらうことが当たり前

になり、与えてくれる人への感謝の心も尊敬の心も育たなくなってしまうのです。

ウイグルの生活は貧しく、例えばタクラマカン砂漠の南の町ホータン地区の農民の年間所得は日本円で1,147円といわれています。実際、物価は安いとしても楽なはずはありません。果物、ジュース、おもちゃなど、子どもの好きなものを気軽に買ってやることは到底できないことです。12歳の男の子は学校から帰ると毎日畑仕事を手伝い、たまに一元（日本円で約13円）のおこずかいをもらうことがあるが、それをためてノートなどの学用品を買うのです。

しかし、日本の子どもたちもついこの前までは、ウイグルの子どもたちと同じような貧しい生活をしていたわけです。朝食は麦飯、みそ汁、漬け物が中心で魚や肉を食べることはめったになく食べても鯛や鯖が少々というのが普通だったようです。当然、果物やジュースのような飲みもの、あるいはおもちゃを買ってもらったりすることができるのは、お祭りやお正月など特別な日に限られていました。世話のされ方も、子どもの心の発達に強く影響します。子どもは大きくなるにつれて、自分でできることは自分でします。ところが子どものすべきことを先取りして世話をしてしまうと、子どもは自分では出来なくなってしまうでしょう。しかも、してもらえないと我慢することが出来ない子になってしまうのです。

ウイグルの子ども達は幼いころから自分のことは自分でするようにしつけられています。日本でも昔は小学校に入る前から「自分のことは自分でする」ようにと教えられ、そうするようにしつけられて来ました。しかし、今はどうでしょう。なにからなにまで親にしてもらっている子どもが少なくないように思えるのです。

子どもは将来みんな心の豊かな人間になろうとしています。そうした発達の可能性を秘めた存在であるといえます。いわば花の種のようなものです。種は土に蒔かれ、肥料と水と日光が適当に与えられれば、芽を出し、葉をつけ、い

つか美しい花を咲かせます。しかし、非常にやせた土地に蒔かれ、水も肥料もなくなつては芽をだすことすらむずかしいでしょう。では、反対に非常に肥沃な土地に肥料をどっさり入れ、毎日水をジャージャーかけていたらどうなるでしょう。早く美しい花が咲くどころか、種は腐ってしまいます。子どもの心の発達もそれとまったく同じではないでしょうか。

日本は今や世界の中でも最も豊かな国の1つであります。健康を害したり、心が傷つかないように配慮することができるはずで、豊かなことそれ自体は決して悪いことではありません。しかし、あまりに保護され、管理されているとはさまざまな失敗や挫折、子どもらしい自分の生活が体験できなくなってしまう。結果として、自主性、社会性、耐性など心の能力が身につかなくなり、又自分がなにをしたいのか、将来への夢もなくなり自己の存在感すらなくなってしまうのではないのでしょうか。

(ハ) 子守りについて

ウイグルではどこにいても小学生ぐらいの子が幼い子をまるでお母さんのように優しく子守りをしている姿や、大きい子が小さい子の面倒を見ている姿を見ることが出来ます。こうした体験は子どもの人間関係にかかわる能力の形成に大きな影響を与えているものと考えられます。

人は人と交わることによって、初めて相手に対する関心や愛情がもてるようになるといえます。ウイグルの子も最初は子守りなどをしたくないかもしれませんが、しかし、家庭の事情がそれを許さないのです。幼い弟や妹は、そんなお姉さんやお兄ちゃんの気持ちも知らず、時にはわがママをして困らせたりします。でも、お姉ちゃんにだっこされたり、世話をされたり、遊んでもらったりするなかでお姉ちゃんを頼りにし、お姉ちゃんが大好きになるのです。そんな弟や妹を見て、お姉ちゃんもまた可愛いと思うようになります。こうした触れ合いがウイグル

の子ども達の人に対する優しさや接し方を育んでいるのかもしれませんが。ひるがえって、日本の子ども達はどうかでしょうか。少子化が進行し、異年齢との遊びがなくなり、しかも隣近所との交流が希薄になってきている状況のなかで子守りをする子、される子はほとんどいなくなりました。このことは、日本の子どもたちが人間関係の基本に関する体験をしないまま育って来ている事を意味しています。しかし、考えてみると子どもが子守りをしている姿は、1955年ごろまで日本のあちこちでみられていたのです。

おわりに

日本に来てからの体験や勉強などで、取り敢えずここまで文章化することができました、まだまだウイグルの子どもたちの教育などについて説明したい事は沢山ありますし、日本の子どもたちや、教育に付いても書きたい事が見つっています。

これからさらに勉強して行きたいと思っています。

引用・参考文献

1. ヤルマモマデ, タイル:ヤルマモマデ, タイルウイグル族(ウイグル)的子女教育.(ウイグル語) -新疆大学出版社, 2001.
2. 新疆教育, XJEDUCATION (ウイグル文版), 1998.
3. 王菓华:発達心理学(中国語), 東洋経済1999
4. 王未华/主編:我門是怎样教育孩子的「我々が子どもに対する教育」.(中国), 中國婦女社出版社, 2002.
5. 凤雏 編著:每个父母都是教育家.(中国語), 海潮出版社, 2001.
6. 胡玲莉 編著:孩子. 不同凡向.(中国語), 中国商業出版社, 2002
7. 焯子 編著:我們如何做父母.(中国語), 内蒙古文化出版, 2001.
8. 平原, 寺崎(編):『新版教育小事典』学陽書房, 1998.
9. さくらももこ:『ももこの21世紀日記No.1』幻冬舎, 2002.
10. 萩原元昭(編):『幼児教育の社会学』放送大学教育振興会, 1999.
11. 森上・柏女(編):保育用語辞典 ミネルヴァ書房, 2000.
12. 湊, トミタ(共著): 田んぼの学校 農村環境整備センター, 2001.
13. A・パウアー(池田, 鈴木共記): 子供の心をいやす魔法のメルヘン. 2001.
14. プロ教師の会:学校の教育力はどこにあるのか. 洋泉社, 2001.
15. 日鉄ヒューマンデベロップメント:日本一その姿と心(日中対照). 学生社, 1999.